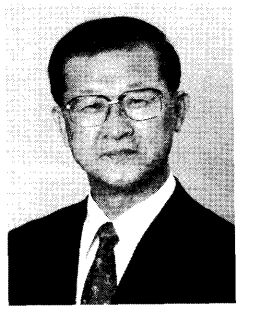
●新春教育随想●

国立大学法人としての新たな挑戦
～名古屋大学がめざすもの～



平野　眞一
（名古屋大学総長）

一　はじめに

国立大学が法人化となってから一年を迎えようとしている。本学では法人化前から基本的な制度設計などについての検討を重ね、それなりに周到な準備を進めていた。それにも拘わらず法人化直後には大学運営の根幹を揺るがすほどのことではないものの多種多様な課題や問題に直面し、しばしば、それらを解決するために膨大な人的資源や時間を費やしてきた。それほど法人化に付随する業務量は膨大なものであったが、幸いにして、全構成員の不断の努力によって運営体制も軌道に乗りつつある。同時に研究面では一四件の研究テーマが二一世紀ＣＯＥに、また、教育面では二年連続で特色ＧＰ（グッドプラクティス・プログラム）に採択されるなど、本学が掲げた中期目標・中期計画の達成に向けて着実に進展している。

だからといって、現在の社会環境の諸状況に鑑み、これで満足し、安穏としているわけではない。本学としては、今をスタートとしてグローバル時代に相応しい総合大学を目指すため、これまで以上に全力で挑戦し続ける決意である。この決意の実現に向けて、私自身を奮い立たせるために本学の将来像についての一端を述べさせて頂くこととした。

二　社会環境と大学教育

我が国が抱える構造的な財政赤字の問題と相俟って、急速な少子化及び高齢化社会の到来など社会基盤の根幹に関わる問題、金融機関をはじめとする大規模企業の合併・リストラ・失業・年金など生活基盤に関わる問題、そして若年層に纏わる無惨な事件の多発に見られる不条理な問題など、ことさら終末観を思わせる情報が氾濫している。これらの現実に触れるたび、かつてないほどの不確実性や閉塞感に戸惑いを感じている人は多いと思う。このような社会環境下で育った若者達は、程度の差はあれ、多くは内面に心許ない存在感（Identity crisis）を抱えながら大学に入学してくる。その結果、仲間と一緒に居るときでさえ孤独感や疎外感を覚えるようになっている。そして、入学後しばらくすると、潜在化していた葛藤が現象として顕れる。本学でも学生相談件数が年々多くなっている傾向にあるが、件数の多さよりも悩みの多様性に学生相談担当教員は驚かされているものの、その悩みの根源は同一と捉えている。

さて、学生は入学後に初めて最高学府に相応しい深遠な学問の世界に触れることになるが、自身の基礎学力の欠如からか、次第にその深遠さに喜びを感じることも無く、単位の修得と学位の取得に目標が移ってくる。このような様相が現代の大学が抱えている問題の実像と理解している。つい最近までユニーバーサル化によって若者達のレジャーランドになっていると大学は揶揄されていた。だが、今でもユニーバーサルである状況は変わっていないものの、最早、揶揄もできないほど社会環境は混迷の度合いを深め、我が国の将来を担う若者社会にも悪影響を及ぼしていると感じる。このようなパラダイムシフト（Paradigm Shift）にあって、大学も無関係ではいられない。時代性からくる学生達の新たな問題の解決は、鎮痛剤のような一過性の方策では事足りるものではない。「何を」をもって解決の根本とすべきなのか。私は「教育」に求める以外にないと信じている。そして社会自体も「教育」の重要性を再認識し、教育を教育機関に委ねるという消極的な風潮から、社会全体が「教育」のために何をなすべきかを問う時代にならなければならないと考える。

三　名古屋大学の学術憲章

このような社会環境にあって、本学では二〇〇〇年二月一五日、本学の憲法ともいうべき「名古屋大学学術憲章（以下「学術憲章」という）」を制定した。この「学術憲章」には本学が果たすべき使命、教育研究活動に対する理念、及び「手本」

とすべき行動規範を定めている。「学術憲章」の詳細は本学のＨＰに掲載しているので省略するが、「学術憲章」のエッセンスをあえてワンフレーズで言うならば「勇気ある知識人を育てる」ことである。無論、ここにいう「知識人」とは、いわゆる「大衆」と対比する階層的な存在を意味するものではなく、勇気ある「個々の人」を指すことは言うまでもない。その具体的人物像を「学を授け知識を付与することによって、総合的、自主的判断力に支えられた豊かな人間性を有し、現代社会において存在する諸問題の解決に向けて主体的に、かつ果敢に取り組む、創造性にあふれ心身ともに健康な人材」と定義した。

「学術憲章」で謳う理想は、本学が如何なる社会環境下におかれようとも不変であり、その実現のため、全教職員は想いを一にして教育研究に邁進しているところである。この「学術憲章」に対し、あまりにも理想主義的すぎるとの御批判はあろうかと思う。しかし、私は、高邁な理想を掲げ、その実現に向けた行動こそが、現代社会における諸問題を解決するための必然的行為であると考えている。そのためにも一切の妥協を排し、最大限の努力を傾注する決意である。このことが国民から付託された国立大学法人名古屋大学の使命であり、間断無き挑戦と心得ている。その結果として本学の在学生や卒業生の一人一人が社会から賞賛されるようになることを願ってやまない。

四　教育研究に関する基本姿勢

昨年、総長として「名古屋大学運営の基本姿勢（以下「基本姿勢」という。）」を取りまとめ、学内はもとよりＨＰに掲載し、広く社会に公開した。ここでは「基本姿勢」で述べた考えを基に、少々具体的に教育研究や学生支援のあり方などについて述べる。

現在、学問・科学が迫られている課題はいよいよ明確になっている。急速に発達してきた科学技術は、人類の福利という「光」とともに、その生存を脅かす「影」をももたらしている。二一世紀にあっては、学問・科学は「光」の面を進展させるとともに「影」の面を制御して、全地球規模での持続可能な発展を図ることが最も重要な課題であり、その実現が責務であると考える。本学もまた、このような人類史的課題の解決を担う「知の拠点」として、その活動を展開することが求められていると認識している。そのためには「創造的な研究活動によって真理を探求し、世界屈指の知的成果を産み出す」ことであり、今ひとつは「勇気ある知識人を育てる」ことである。すなわち、本学では研究重点大学として世界最高水準の学術研究を推進するとともに、勇気ある知識人を育成することが本学の使命と心得ている。

一口に科学技術における「影」を制御し「光」の面を進展させるといっても、それを達成するための「人」の存在が鍵となる。従って、自己の創造性を駆り立て「真理の探究」への強い意志と忍耐強さを持った研究者、また「勇気ある知識人」の育成を喜びとする教育者の存在が不可欠である。私自身は優れた研究者は、同時に優れた教育者であると確信している。しかしながら、「人」にはそれぞれ個性があるように、適性があることも見逃せない。こうした観点から、人材起用にあっては「研究者」または「教育者」の適性を見極めることが重要なこととなろう。更には、知の継承と次世代への文化の発展を支えるためには、異分野間での協力関係も必要不可欠な要素である。いうまでもなく学術・文化は「人」が創造するものであり、「学」はまさにHumanityそのものである。「学」の発展のためには文系・理系の強い連携が必須であり、いわゆる文系部局と理系部局が一体となり「俯瞰的」見知から発展することが極めて大切であると認識している。

なお、一口に教育といっても家庭教育、初等中等教育、高等教育、また他者や社会との関わりから学び取る教育など、その有り様は多様であるが、突き詰めるところ「自己教育の方法を確立する」ことにあると思う。大学はそのための最高の「場」でなければならないと自覚している。その「場」を醸成するためには、大学固有のミッションや特質を活かしながら、他の大学と「質の高い教育実践」を基軸として連携するとともに競い合うことを「是」とする教育パラダイムの創造が不可欠である。その行き着く先が「学生中心の大学」ということになろう。しかし、「学生中心の大学」は「学生におもねる」ことではない。このことは学問の伝授と真理の探求のための人間集団が最終的にUniversityとして結実した歴史的事実からも、大学は、「学」を中心とした「場」であることは明白である。学生の多様なニーズに可能な限り真摯に応えながらも、彼等の良心、智慧、個性を開花させ、社会へ送り出すことが大学の使命であり、ひいては現代社会が抱える諸問題を解決するための最善の方途であり、最も近道であると考える。

五　教育環境

「勇気ある知識人」を陸続と輩出するためにはどうするか。しごく当たり前にいえば、体系的かつ先進的なカリキュラムに基づき、人間的にも教育者としても優れた「人」によって教育が行われることである。この原理の実現は極めて厳しい現実にあるが、あえて挑戦してみたい。

学生にとって良い影響を与えてくれる教員との出会いは、学生の将来にわたって重要な意味をもつことはいうまでもな

い。私自身も高校や大学時代に出会った先生の魅力によって自身が高められ、今日の自分が形成されたと思っている。日本学術振興会が発行している学術月報に「師を語る」という記事が長年に渡って掲載されているが、これを読むたびに、それこそ数え切れないほどの科学者達が「良き師」に巡り会えたことへの感謝の念が綴られている。その思い入れのほどは、私も共感できる。そうした思いから「あの先生がいる大学だから入りたい」とか「名古屋大学だからこそ入学したい」と思ってくれるような魅力あふれる大学にしたいと思う。そのためにも学生達を決して失望させることのない教育環境を創りたい。それは学生一人一人が良い個性をもっていると思うが故に、彼等の感性に耐えられる「場」の創造が不可欠であると感じているからである。私自身も経験したが、講義のなかで学生達が学問のすばらしさに「はっ」とするような経験をしてほしいと念願している。このような良き教員と出会える環境の創造に努めたい。その上で、純粋で多感な一、二年生の段階に学問の成り立ちを十分に理解させ、かつ批判的思考力をつけさせることが、とても重要であると考える。

(一) 教養教育院

先の想いの試みとして、本学では平成一三年一二月に学内措置により「教養教育院」なる組織を設置した。この組織は、本学の全学教育（共通教育）に関する企画、立案、実施及び評価のヘッドクオーターとして、全学教育の管理運営上の全責任を負う組織である。具体的には「カリキュラムと授業内容を絶えず点検・評価し、リニューアルして、成長、進化させ、初年次教育の資質向上」させるための組織である。そのなかにあって特徴的な試みである「基礎セミナー」について紹介したい。このセミナーは少人数教育のコア科目であり、理系・文系の学生が同じセミナーに参加し、学問的知識の探求プロセスとそのおもしろさを体験し、自立的な学習能力を育成することを目的としている。授業アンケート調査結果で見る限り、学生からは高い支持と満足感を得ている。さらには、初年次に全人教育の基礎を築く教育メニューを是非とも取り入れたいと考えている。全人教育のためには、体験学習や課外活動も極めて重要な手段である。特に少子化や電子情報化の中でともすれば孤立的状況にある現代の学生には、集団的な体験の場が必要であり、そうした皮膚感覚での体験を通して本来的な「人」としての成長が図られると考えているからである。

(二) 専門教育

これまで文明や文化を支えてきたのは、広義の基礎科学の幅広い展開があったからであると認識している。持続可能な社会の構築のためには、自然との調和を考慮した「人の営み」を基軸とした教育・研究が必要である。そのために専

門教育では、専門分野における高度の専門性と独創的な発想で展開する学際的分野での資質を育てる複眼的な素養を涵養するような教育を求めたいと思っている。そのためにも学部間履修の促進を図りたい。専門教育は学問を発展させ、社会が要請する実力をつける上でより深化させることも必要ではあるが、同時に他の分野を俯瞰的に捉え、次なる展開を総合的に判断し、新しい学問分野や新しい科学技術を創生する能力を持った意欲あふれる人材を養成することも必要である。新しい教育組織である専門職大学院については、母体となる研究科が責任をもって支援することは当然であるが、学内で開講されている他研究科の関連カリキュラムをも受講できるプラットホームを設定し、広義の意味でのリベラルアーツの充実を図ることも重要であると考える。学生には学部および大学院教育を通して未解決な問題の解決や新規分野の創成にチャレンジする経験を積ませていきたいと思う。

六　学生支援

財政的には厳しい状況にあるが、平成一七年度から毎年約一億円程度を新たに捻出し、学生の福利厚生の強化・充実経費に充てる予定である。また、近々「名古屋大学基金（仮称）」を創設し、この基金のなかから本学独自の「育英制度」を設けることも計画している。このような経済的支援もさることながら、学生が様々な問題や悩みに直面したときに気軽に、しかしながら専門的で十分にケアができる学生相談体制の充実を図りたい。その中心的役割は当然「学生相談総合センター」が担うが、学生ボランティア団体等との連携など、あらゆるチャンネルから学生が抱える問題や悩みをキャッチできるシステムを構築したいと考えている。

学生支援は各大学が独自に強化・充実を図ることが基本である。しかしながら、先に述べた「社会が教育のために何をなすべきかを問う時代にならなければならない」ことを単なる理想とすることはできない。そこで昨年（平成一六年）六月、愛知県下の国公私立大学、愛知県、名古屋市及び愛知県経営者協会等の諸団体が連携し、学生の修学と生活にかかる支援を行う「あいち学生支援コンソーシアム」を設立した。そして、このコンソーシアムと日本学生支援機構が一体となって、積極的に学生支援に関する事業を展開する試みを始めた。

最後に、少し世界に目を向けると経済至上主義や利己主義的な流れが強く感じられる。このような流れを感じる限り、これを変革してゆく「勇気ある知識人」の育成に全力を尽くすことこそが、本学の使命であると認識を強めている昨今である。